

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL.59



双海町 牛の峰地藏

特 口ーカルに生きる 集

ー地域を拓く人々ー

- わがまち？宇和町
- 循環する小さな生活の中で
- 産直でみつけた楽しい農業
- 花づくり・過去・未来
- 夢への大きな一歩

■ 論談ーまちづくりー

新潟やぶへびの会 寺島 義雄

■ キラリ光るまち

徳島市 国府町

好評連載

★ 歩き目デス&足ラテス

岡崎 直司

アングル

小さな美術館 坂本善三美術館を訪ねる……………砥部町アートの里づくり会議代表／矢野 徹志 …………… 1

特集

『ローカルに生きる』

ー地域を拓く人々ー

わがまち？宇和町……………宇和町／ケース・オウエンス …………… 2

循環する小さな生活の中で……………丹原町／西川文抄子 …………… 4

産直でみつけた楽しい農業……………内子町／野田 文子 …………… 6

花づくり・過去・未来……………今治市／塩見勝太郎 …………… 8

夢への大きな一歩……………小田町／高橋ひろみ …………… 10

論談ーまちづくりー

うっかりはまった「まちづくりワークショップ」……………新潟やぶへびの会／寺島 義雄 …………… 12

キラリ光るまち

みて さわって つくらんで 町全体が博物館……………徳島市国府町／寺岡健二郎 …………… 16

リレーでちょっとーク

広田村への想い……………広田村／富岡 一宏 …………… 18

夢をもつ 夢をつくる 夢を育てる……………松山市／福田 雅世 …………… 19

風おこしのちかい

地域に生きる＝織錦在郷……………松山市／青木 光利 …………… 20

研究員レポート

過疎問題を考えるー過疎シンポに参加してー……………檜垣 明宏 …………… 22

まちセン事業レポート'98秋……………藤田 享 …………… 24

MY TOWN うおっちゃんぐ

干支探しウォッチング “卯”……………岡崎 直司 …………… 26

Information

媛のくにフラッシュ〈三間町・大洲市・愛媛県〉…………… 28

特集「ローカルに生きる」

今号のテーマ

地域を拓く人々

戦後いや明治以降、人々は、便利さ・効率といったことを追い求め、田舎から都会へと向かいました。しかし今、バブル崩壊などをきっかけに、再び、田舎暮らしに関心が向き始めているようです。

しかし、ただ単になつかしさや憧れだけで、地域に住むということは、なかなか難しいように思います。たぶん人の流れが変わるためには、便利さ・効率に代わる新しい価値観・ローカルな思想といったものが必要になるのではないのでしょうか。

そこで、今年度の特集「ローカルに生きる」の最終号となる今号では、田舎暮らしの先端を行っている人、地域で創造的な生き方をしている人にスポットを当ててみました。

(編集子 檜垣)

表紙の言葉

標高八九五メートルの牛の峰。双海シーサイドを後に一気に登ると海が目前に広がる。急な坂道を登り切った安心感か、この青い海が深く心に残る。杉林の中にお地藏さんがひっそりと。信仰深い人は、島からも、港に着くなりタクシーを飛ばして縁日にお詣りをする。母も学生時代に遠足で登ったが苦しくて二度と来る気がしないと振り返る。今は、人気のパラグライダー基地。休日には眼下の青い海に気持ち良く飛び立つ。

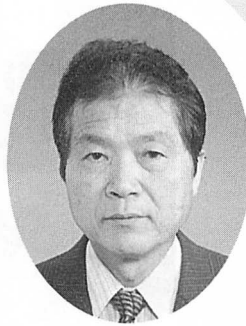
柳原 あや子



小さな美術館 坂本善三美術館を訪ねる

砥部町アートの里づくり会議

代表 矢野 徹志



小さな美術館巡りで、熊本県小国の坂本善三美術館を訪ねた。同館は樹齢七百年を越す小国杉の生い茂る銚納神社の神域に接する画伯の生地にあり、明治五年に建てられた民家を移築・再生し、新しく展示棟を合体させたユニークな町立の個人美術館である。そこで町づくりの中の美術館の在り方、考え方に触れて、久しぶりに心が洗われた。

坂本善三はバリに出て抽象画に新しい道を開いた画家であるが、小国の自然の中で育まれた坂本芸術の展観は、小国の自然に培われた民家であるべきだというコンセプトから設立された。二十一世紀に向かつて自然と人間が調和する悠木の里づくりを目指す小国町の町づくりの一連の構想の中から誕生した町の新しい施設である。

美術館が都市に集中傾向にある中で、何故、小国なのか。作品が具象ではなく、何故、抽象なのか。そして、何故、民家なのか。一見相反すると思われるこれらのことがらを対立させることなく見事に調和させている。まず、建物に出会い、畳の敷かれた展示空間で抽象作品に出会う。その清々しい、気高い精神の具現の場。その空間の、また館のコンセプトの何と素晴らしいことか。そして、透明な

ことか。

「この美術館は、木造の美術館です。どうか靴を脱ぎ、畳に座って、ゆったりとした気持ちで観賞してください。障子からの柔らかな光り、床の間と畳の均衡、柱・梁の力強い構成、その伝統的な静寂の空間が、きつと坂本善三の芸術を理解する道筋を開いてくれると思います。」

たまたま、その日は、韓国の現代作家の芸術が展示されていた。「東アジアの一点としての自覚から世界に向かつて開かれた窓をもつ美術館であろうとする」企画展であった。

ボクを感動させたのは、さりげなさの中にも緻密で、坂本芸術を誇りとし、住民とともに支えあう純粋な住民の心であった。同館発行の「坂本善三美術館建設計画」の中から引用する。「坂本芸術を、東京で見せるより、やはり小国なのです。東京の人も、小国

の朝露の中でシーンとした空気に立ち尽くし、川のせせらぎの音を聞けば、善三先生の芸術がよく分かると思います。作家が愛し続けた風土の中で、その絵を見せる、それこそ、日本一の個人美術館だと自負します。」

「一番大切な協力関係はもちろん地元の人達です。ある程度の絵の見方は訓練が必要です。月一回位講演会を開きたい。多目的ホールもほしい。そこで、コンサートや画家の合宿をやり、お花やお茶の稽古をする。町の人から小中学生の絵の勉強ができる施設をと言う声がでたら、また別の施設を造ったらいい。」これは初代館長さんの抱負だ。何と柔軟で優しいのだろう。

小さな町に小さな美術館が一つ存在する事が、これ程地域イメージを際立たせてくれるものか、限りなく透明な感覚に浸ったのである。



では、なぜ、私ははるばるオランダからやってきたのか。なぜこの宇和で、土地を買い、家を建て、働いているのか。それを説明するのは、難しい。いつまでここにいいのか、私の目的は何なのか。だれにもわからないし、場合にもよるだろう…。

今の私には宇和の 自然が必要

何年もヨーロッパやインドネシアに住んで仕事をし、いろんな経験をして、ここ日本で新たな挑戦を始めている。宇和に住み、働くことで、明確にできない何かを探している。だれも私にそれを教えてはくれないし、だれも知らない。今、確実にわかっていることは、宇和はアーティストとしての私の成長に、とても重要な

だということである。それは、自然の法則によって自然にもたらされた感情である。もつとわかりやすく言えば、「私の運命」である。

これは説明できるものではないが、私はその存在とその力の強さを確信している。それは、私に、行動する目的、エネルギー、能力を与えてくれる。ここ宇和に住むことを決めた主な理由の一つは、この場所である。ここは、美しい山や田んぼに囲まれている。地元の人々は、毎日、茶畑や田んぼ、野菜や果物の畑を耕している。また、ここには比較的まだ手つかずの自然が残っており、とても静かな所である。自然とのつながりは、私にとって、仕事に重要で、なくてはならないものである。自然は、私のエネルギーとインスピレーションの源である。

自然の原料のいろいろな形、色、感触は、仕事を通して私を表現する方法を教えてください

る。この方法は限らない。ただ、それらを発見する方法を見つけるなければならない。確かな視覚を養い、少し考え方を換え、それに応じた生活を始めなければならぬ。わかりにくいかもしれないが、実際は簡単である。「基本にもどった」ライフスタイルである。だから、私が生活し、仕事をしているのが町宇和での日々や、周りの自然は私にインスピレーションを与えてくれる。例えば、空の雲や田んぼを渡る風を見ていると、新しいア



アトリエから見る外の景色
自然護岸の池がケースのお気に入り

なぜ宇和町に？
私は、ここ宇和町で何をしているのだろうか。日本の他の小さな町とそんなに変わらない、この小さな町は何か特別なのだろうか。ここは、米と酒と木材で有名である。それくらいで、あとは何もない。

イディアがわいてくるのである。私にとって、これがすべてで、他には何もない。

私は、宇和のことで解説したり、批評したりするためにここにいるのではない。私は、宇和に住

んでいる多くの人々の中の一
人にすぎず、それ以上でもそ
れ以下でもない。人々は、共
に協力して仕事や生活をし
たり、自然と共存する社会を創
造したりしなければならぬ。
そうすることで、人々の生活
は豊かになり、文化が繁栄す
る。

そこで、最終的になぜ、宇
和町なのか。

私は、この疑問への答えを
見出していない。宇和の自然
や人々と調和しながら、ここ
で長く生活することを望んで
いるだけである。(訳・檜垣)

My Town, Uwa-cho?

What am I doing here, on Shikoku, Ehime prefecture, in UWA-Town? What is there so special about this town, just a little town like any other little town in Japan? Locally it is famous for its Rice, SAKE and timber. That sums it all up, there is nothing else. So why did I come all the way from Holland? Buying my own plot of land, building my house and working place. Why here in UWA? That is something hard to explain. For how long will I stay here, what is my purpose? Nobody can tell, it all depends.....!!

After many years of living and working in Europe and Indonesia. After a lot of exploring and many different experiences. I am starting a new challenge here in Japan. Through living and working here in UWA, I am searching for an undefinable something, a thing an anything.

What that may be nobody can tell me and nobody knows. What I do know for sure is that, at this very moment, UWA is very important for my development as an artist.

It is a feeling that comes to me naturally, something that is ruled by the laws of nature. To put it in other, easier words, "My destiny".

That feeling of exactly knowing why you do the things you do that natural feeling is unexplainable, but I am convinced that it does exist and its power is very strong. It is giving me the purpose, energy and the ability to do the things I do.

One of my main reasons for deciding to live here in UWA is the location of my property, it is surrounded by beautiful mountains and rice fields. Local people are every day, cultivating their tea-plantations, rice-fields, vegetables and fruits. It is also a very quiet place where nature is still relatively, untouched. That connection with nature is for me very important, a must for my work, something I can not do without!!

Nature is my main and vital source of energy and inspiration.

The many shapes, forms colours and textures of nature's materials, teach and instruct me on how to express myself through my work.

Its resources are unlimited you have only to find a way of discovering these marvels of nature. You have to develop a certain sense of looking at things, change your way of thinking a little bit, and start living accordingly to it. All of this may sound very complicated but in fact is rather easy and simple. It is like living a life-style that you may call "back to basic". So every day when I am living and working at my place here in UWA, the surrounding nature gives me inspiration.

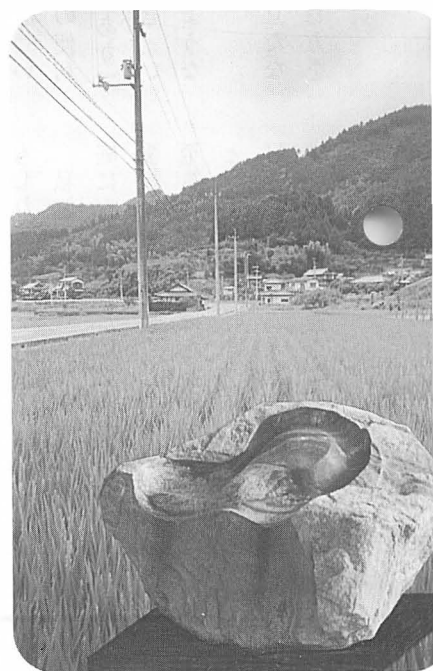
For instance, only looking at the sky above on how a mass of clouds is moving or watching how gusts of wind are blowing through rice-fields, changing patterns, gives me new fresh ideas. This is all that matters to me and nothing else. I am not here to teach or give explanations or comment about anything concerning UWA or on any subject there may be. I am only one of the many people who are living here in UWA, nothing more and nothing less.

People have to work and live together in harmony, communicate and create a society, which coexist with nature, so that people will live a rich life and culture will flourish. So finally why UWA-cho?

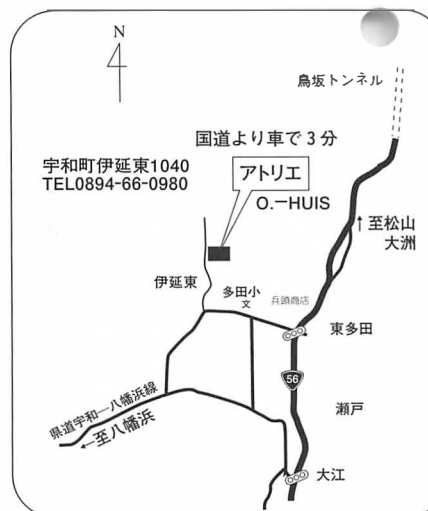
I do not have the answer to this question, I only hope to live in harmony with nature and the people of UWA, for a long period!!

KEES-OUWENS

C.A. Ouwens
田'90



「たんぼプロジェクト2000」イメージ
1999.1.15から1年間
宇和のたんぼの中に彫刻が！
四季折々にイベントも！！



特集

ローカルに生きる ― 地域を拓く人々 ―



循環する小さな生活の中で

丹原町 ちろりん農園
西川 文沙子

都会嫌い

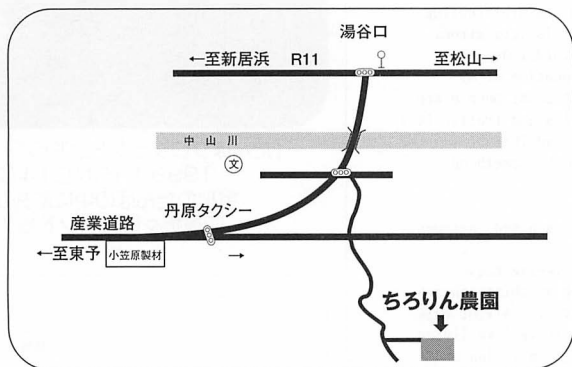
横浜生まれの私は、サラリーマンの父の転勤に従って東京→西宮→大阪と移り住みながらごく普通の「都会の子」として育ちました。物心ついた頃からその時代時代の便利な品物が身のまわりにあり、小学生の頃から塾に行き、いくつかの習い事をするような生活です。

変えて、少しでもいいから生産する人の側に入りたいと思いはじめたのは思春期以降ですが、大阪の高校で夫と同級にならなければ、その思いを実行に移すことはなかったかもしれません。

私と同じくサラリーマン家庭に育った夫と私が結婚して愛媛県で農の暮らしをするに至る経緯を逆にたどってゆくと、夫の昆虫好き、私の植物好き、そして二人とも都会が嫌いという共通点につき当た

ります。

ただ、都会とはいっても、昭和三十年代は東京にも大阪にもまだ自然がたくさん残っていて、私たちはそれぞれに田畑や原野、池や川辺で遊びながら小学生時代を過ごしました。私たちが嫌いだった都会は、間もなく始まった高度経済成長の波に押し流されて子供たちの解放区が次々と消えてしまった後のコンクリートに固められた都会です。



ですから、昆虫や植物がご

くあたりまえに身のまわりにあるような生活をしたたいという思いはずっと心の底に残っていました。それを核にして、自分の食べるものはできるだけ自分で作ろう、便利や快適をお金で買うことはなるべく慎もう、農薬や除草剤は食べる人にもつくる人にも有害だから使わない。化学肥料は土の健康を害するから使わない、たとえばニワトリを飼い、鶏糞を肥料にして野菜を育て、廃棄部分を動物に食べさせる・・・そんな循環を小さな円を描くように生活のあちこちに作ってゆこう。それが積み重なっていつの間にか十八年という年月になりました。

有機って何？

最近では有機農業とか有機農産物という言葉は耳慣れたものとなりましたが、その解釈はいろいろです。そこで、有機農産物についてのガイドラインが検討されているよう

ですが、この定義づけはなかなか難しいと思われます。一番大切なことは言葉に表しにくいからです。

現在、私たちが野菜・果物・卵などをお届けしている約三十軒の方たちの中には、十年以上のおつき合いになる方も何人かいます。単に農薬・化学肥料・除草剤を使わない安全な農作物を作るといっただけでなく、それらを直接消費者に届けることでお互い

のコミュニケーションをはかり、食べものとお金を交換するだけではないつながりを作ることが、私たちの考える有機農業です。それは作る側に責任感と誇り、食べる側に信頼、そして、お互いに感謝の心がなければ成り立ちません。付加価値だけに目を向けた有機農業には大きな「?マーク」がつくのではないのでしょうか。

人との縁を開く

私たちが結婚したのは一九八〇年です。町内の神社で式を挙げ、公民館で会費制の披露宴をしました。地域の人たちが料理を作り私たちの出発を祝ってくれた手づくりの結婚式でした。皆に暖かく迎えられてのこのゼロからのスタートが、今も私たちの誇りです。あれから多くの人達との出会いがありました。最初の頃は農業関係の生産者や消費者が殆どでしたが、十年ほど前、夫が地域づくりのグ

ループに関わってからはより幅広いおつき合いが増えました。更に、神戸の国際協力団体の会員になったことから、いろいろな国の人達と触れ合う機会を多く持てるようになりました。

ニワトリをはじめ、多くの動物たちを飼っている私たちは、身軽に遠出することができませんが、国籍、職業、境遇などが全く違っていても、より良く生きるために努力している人達と知り合うことは刺激にもなり、勉強にもなります。そのために、数年前五坪ほどの「縁開所」を建てました。いろりを囲んで語り合い、飲み、歌う、文字通り縁を開く場所です。今後もここでたくさんのお会いが生まれることでしょう。

再び二人に戻る日に

現在、長男は十七歳、次男は十五歳、夫と協力して

やってきた子育ても終わりに近づいています。今しばらくの模索の後に、彼らがそれぞれ独立して新しい家族を作ってゆく日もそう遠いことではないでしょう。

再び夫と二人に戻るまで今の生活をもっと自給（食べものだけでなくエネルギーも）に近づけてゆきたいものです。私が求めているものは農業そのものというよりは、農を含めた暮らしのあり方・・・今後生活の中の発見や工夫を楽しむながら循環の小さな円をいくつも描き続けてゆきたいと思っています。



縁開所





産直でみつけた楽しい農業

内子町 農業

野田 文子

農業は面白い

「農業は工夫とアイデアで、自由があつて面白い」そう思うようになったのは、農産物直売所へ出荷するようになってからでした。

専業農家へ嫁ぎ、葉タバコ、栗、ユズ、椎茸と複合経営をする父を手伝い、父が亡くなると今度は夫の手伝役として働く、ただ父に比べ、夫に仕える農業は、私にとっては面白さも楽しさもありませんで

した。言われての農業はしんどく自分の思うように行動もとれない。農業はつまらないもの、いつも思っていました。

平成六年、内子町に農産物直売所が開設されました。一十八年間、夫の手伝役として働いてきた私は、これからはずっと農業をやっていくしかないのならば、これからは手伝いの農業ではなく、直売所向け農業を私自身の経営でやってみたいという思いがつのりました。

夫と話し合ってから会員となり、出荷し始めましたが、なかなか思うように売れませんでした。しかも、朝・夕と引取に行かなければならないため、夫は仕事が思うようにできなくなり、「ガソリン代はいるし、物も残る。もう直売所にはいくな、やめてしまえ」と言っている意見が合わなくなりました。それでも私は、出荷し続けました。

やがて消費者から、「野田さんの椎茸のファンですよ」「お花はいつも野田さんのを買うのよ」と声がかかり始めます。すごく嬉しく、今までに味わったことのない感動そのものでした。いくら夫にどなられても、いつも直売所へと足が向いていました。夫の仕事があるから思うように出荷ができず、気を遣って荷造りもしなければいけないし大変でした。でも、私は直売所行きをやめる気持ちにはなれませんでした。

一人の経営者となつて

約一年後のある日、突然夫が、「それほど産直市場へ出荷したいのなら畑も収入もすべてお前にやる。思うように自分で考えて、直売所向け経営をやってみろ」と言ってくれました。

その日から、夫は自然原木椎茸、私は直売所向け農業と、二人は別々の経営者としてスタートしたのです。助け合っても口出しはしない。私は安心して作付けをし、出荷することになりました。夫も自分なりに計画を立てて働いています。

考えや生き方を変えると、こうも農業が楽しくなるのだろうか。自分のやり方で少量の出荷も出来るし、自由に値段も付けられる。消費者ともふれあえるし、生産者と情報交換しながら出荷出来る。これが本当の農業だと思いました。

今までの農業は、一品種多



農産物直売所「内子フレッシュパークからり」

量生産、共同出荷で農繁期があり、残業もつきもの、消毒も年に何回もする、二人がいつもそばにいないれば仕事がかどらない、自分だけの考えで遊ぶ計画も立てにくい、山と家との往復、人との出会いもない、一日中化粧もしない、野良着も変えない。

直売所は違いました。多品種、少量生産、毎日仕事に変化がある、自由がある、人との出会いがある、残業はしない、包装も値段も思いのまま、消毒もあまりしない、収入もその日に

ファックスで知ることが出来る。作付けも季節と共に流れるようにやっていくと、無理をしなくても毎日出荷することが出来る。だから毎日が楽しくてたまらない。

ますます夢は膨らんで

今、“からり”は消費者で活気づいています。それに合わせて生産者も活気づいてきました。農産物、工芸品、加工品、内子町で生産された物は、“からり”に並びます。

農業体験学習もしており、町外から大勢の人が来ています。芋掘りや栗拾い、稲刈りなど、農家が受け入れ、それぞれの生産者の指導で、農業を楽しんで帰られます。

私の出番のドライフラワー作りの季節になりました。「蔓を取りに行つてリースを作りませんか」と募集したら、大勢の応募があり驚いています。午前中は蔓を取りに山に入ります。昼食は、野山で消費者と生産者がふれあいが

ら、お弁当を食べます。午後から蔓を“からり”へ持ち帰り、農家の女性の指導で思い思いの作品を作っていたできます。

農業はやり方とアイデアでいくらでも消費者と共に楽しむことができます。

これから大勢の方々に来ていただいて、いろいろな農業体験をしていただきたいと思えます。私も農家受け入れができるよう

う、一生懸命花作りに頑張っています。春夏秋冬と迎えることができたなら、どんなに素晴らしい農業になるだろうと夢を描いております。

これから先も、新しいニーズを開発し、



消費者とのふれあい交流

生産者の知恵と発想を出し合つて、もつともつと生産者と消費者が共に楽しんでいただく楽しい農業にしていきたいと思っております。



島に帰って花づくり

平成十一年開通予定の、「しまなみ海道」四国側の起点今治より、最初の橋、第三来島海峡大橋・約1kmのつり橋を渡ると、私が家族八人で生活をしている馬島があります。

私はこの馬島へ昭和五十二年大学卒業と同時に帰り、両親と共に花栽培に取り組みました。

なぜ、このような小さな離島（周囲4km、人口三十人余）に帰り花栽培を始めたか、理由はもちろん花づくりが好き

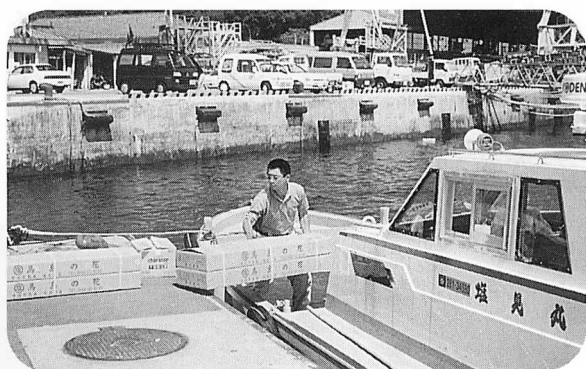
だったから、それと同時に私の先祖が代々島守としてこの馬島を守ってきたのだから、特に私が高校生の時父が奔走し、電気が点灯したときの感激が忘れられなかったからだと思ふのです。

花づくりを始め

て、まず最初にした仕事は、祖父母、両親が丹精こめて作ったみかんの樹を伐採することでした。それまでは、花と柑橘類の二本柱の経営でしたが、島で農業を営むためには、収益の高い花栽培一本にすることが不可欠だったのです。当初の計画として、

南斜面の無霜地帯での冬から春の露地花（マーガレット・キンセンカ等）を経営の柱として、柑橘園の後には宿根草・花木類を植え付け、周年出荷を目標としました。

それと同時に出荷先を松山にある愛媛生花市場一本に絞



自家用船にて花の出荷（波止浜港）

り、出荷の日には、花の勉強もかねて自分自身で花を市場へ持込み、セリの仕事も手伝い、他の生産者の花を手にとって見るといった日々でした。そうした勉強の中で、露地花だけでは必ず行き詰まることを知り、ハウスの導入にもふみきることにしたのです。しかし、そのためには新たな資金、今までは全く違った栽培技術と問題点は多くありました。

最初の転機

そうした花づくりと相前後して、私自身、結婚という大きな転機がやってきました。昭和五十六年一月のことです。妻をむかえ、祖父母、両親と三夫婦そろい意気揚々とした気持ちでした。

ところが、結婚して一ヶ月余りたったある日、私にとって大事件が起きました。異常低温により、露地花が全滅したのです。この時のショックは今でも忘れることができません。しかし、模索状態であったハウス栽培の花は一命をとりとめたのです。色々問題をかかえながらのハウス栽培の導入にも、はずみがついたのでした。

ハウス栽培導入により、栽培する花も新しくなり、栽培技術習得のため花の生産地に足を運ぶことも度々ありました。しかし、生産者によって、ハウスの中へすら入れてもらえなかったり、苦労はた

えませんでした。そのような苦勞がありながらも、経営基盤は徐々に確立されつつありました。

昭和六十年代になると、ハウスの面積も八百五十坪となり経営の九割以上を占めるようになりました。栽培品種も多種多様な状態から、かなり絞りこまれてきました。当初計画の「露地花と花木の栽培により周年出荷を目指す」からはかけ離れてしまいました。が、ハウス物を周年出荷出来るようになったのです。

平成に時代は移り変わり、

家庭においても一男三女に恵まれ、大変幸福な日々を過しておりました。経営も多忙ながらも安定してきたのです。

また新たな転機が

しかしながらそれも束の間。又、新しい問題が起きました。国家的プロジェクトである来島大橋が着工されることになったのです。小さな島にあまりにも大きい建造物。花が作りたいくても作る土地がなくなるのです。島を離れて新しい土地で出直そうかとさえ思いました。そうした最悪の状況でしたが、関係各位

スイトピーのビニールハウス

の御指導により、工事期間中は一時的に経営規模を縮小し、工事終了後可能な限り、規模回復をするといった方法がとられることになりました。

平成十一年五月一日しまなみ海道開通、それと同時に新たな

経営のスタートです。現時点です。温室建築の計画に着手しています。六百坪の温室で冬・春スイトピー、春・夏トルコキキョウ、この二種類の花を柱に、他の草花を周年的に栽培する計画です。今までは市場出荷のみの販売でしたが、橋による観光客の増加も考え、直売所の設置も検討しております。

又、「切り花」のみならず、見て楽しむ花。空き地を利用して年中楽しめるフラワーガーデン造り等も計画し、花栽培の復興に闘志を燃やしています。



馬島全景



東京から小田へ

ODAの木協会は、グローバルな視点に立って考え、教育・文化・地域づくりをテーマに、三つの事業部を設けて県内外・国内外での活動を行っています。その三つの事業部は、国際化事業部・環境教育部（森の学校）・ブランド事業部です。

私はこのようなODAの木協会で平成十年四月から働いています。仕事は主に運営に係わることをしています。

私は、生まれ育ち共に東京

都中野区で、大学まで二十二年間東京に暮らしていました。

私がODAの木協会に就職し、小田町で生活するようになったのは本当に偶然と幸運のおかげだと思いますが、このような分野の就職を選んだということは、私にとっても自然な成り行きでした。

私は小さい頃から両親につれられて山や川でよく遊びました。たくさんさんの自然体験教室に参加し、森や川や海といった自然の中にあることがとても好きでした。そんな中で徐々に地球環境に興味をもつようになり、大学では、森林復元や砂漠の緑化を研究しました。研究していく中で技術が発達していても、地球や森が大切だと思う人の心が育

たないという意味がないと思うようになり、環境教育という分野にとっても興味がわいてきました。「就職するなら、その分野に係わることがしたい」と思っていたところ、ODAの木協会「森の学校」のチラシを東京の書店でみつけ、「これだ」と思い連絡しました。募集はしていなかったのですが頼んだら偶然入れてもらえたのです。

ですから、就職を決めた時点では、小田町はもちろん四国自体にも足をふみ入れたこともありませんでしたが、しかし、こんな就職先はめったにみつからないと思い、決めました。

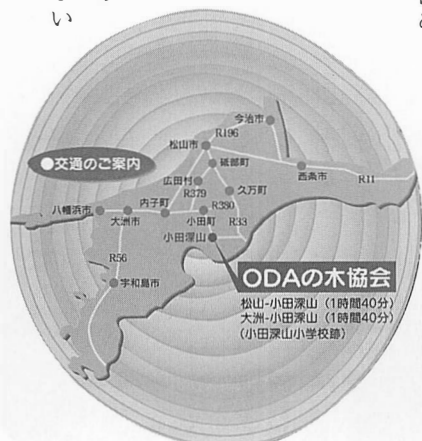
最初小田町に来た時は、正直、こんな所にも町が！と驚きました。東京ではほとんど見られないような景色がそここにある、半年でもまだ見きれないくらいです。

自然に囲まれた生活

小さな町の良さ悪さ、現状もなんとなく判り、とても面白いです。とにかく環境的にぜいたくで、友達にもうらやましがられている状態です。

自然に囲まれたのんびり暮らしですが、ODAの木協会は国際的な活動も行っている、東京にいる時よりも外国の方と接する機会が多いです。英会話に通い、必死で勉強しています。

日々の仕事は運営に係わる事務的な事ですが、各事業部のイベントや事業などを町のボランティアスタッフの皆さん





子供達とのネイチャーゲームの様子

自分なりの 生き方とは

はと思っています。

自分自身の夢は、環境教育についてもっと勉強し、知識・技術・経験をつけて、環境教育者というか、インタープリターになりたいということです。

その夢にとってODAの木協会はとてもよい勉強と実践の場であると思っています。

でもまだ私は足をふみ入れた段階なので、情報もなにもかもが不足している状況です。

自分なりに自分の生きる道というのを見つけていければいいなと今は考えています。

ですから、私にとってODAの木協会に就職できたことがまず私の夢への大きな第一歩であり、これからの一歩一

んと楽しく行っています。

仕事というのは、やはり自分の夢と現実という点でくちがいは必ずあるものですが、でも何ごとにも楽しんで、真剣に学ぶ姿勢で取り組もうと思っています。

私はODAの木に係わるた

歩が重要なのだと心を引き締めています。

小田町はうどんもおいしい

とても美しい町ですので、ぜひ一度来てみられてはいかがでしょうか。



「森の学校」参加者とのピザパーティ

うっかりはまった 「まちづくりワークショップ」

新潟やぶへびの会

寺島 義雄



ワークショップとの

出会い

「ワークショップ」辞書には仕事場、作業所、研究集会となっています。まちづくりのワークショップでは、「参加者が共に討議し、あるいは現場を見、協働でまちづくりの

提案をまとめるなどの作業をする集まり」のことを指します。他にも演劇ワークショップ、環境教育ワークショップ、体験学習ワークショップなどがあります。いずれの場合にも共通なのが、身体感覚を含めた五感をフルに働かせ、一つひとつの事柄を実感することを繰り返しながら、創造的な発現へと向かうことです。集団の個々人が「場への参加」という行為を通して、主体的に行動するようになることが、ワークショップの現場で確認されています。



私たち新潟の「やぶへびの会」のメンバーが、ワークショップに出会ったのはそれほ

ど古いことではありません。三年ほど前、やぶへびの会が始まって三回目の頃だと思えますが、奇妙な会議室（イスを半円型にして、壁に向けておいてあるだけ）で、ポストイットを使って、「やぶへびだより」の編集会議を行ないました。「あれ、こんなに時間がすぎたの？」非常に心地よい疲れと、不思議な充実感でその日の懇親会は大変盛り上がりしました。このときのファシリテーターが、村上市の大滝さん。このあたりからうっかりはまってしまったのです。

二日後、地元であるイベントの会議があり、そこで早速ワークショップを試してみました。ただその会には、いつも晩酌が終わってから出席するおじさんがいて、悪くはないのですがその方のために会議が廻る廻る。その時も開口一番「俺は書かねえぞ!」「何だえんぴつなんて、小学生じ

やあるまいし!」でも、隣の女性と一計を案じていたのです。「あなたが、彼の言ったことを書いてあげて下さい」と。いつも明るく元気な女性でしたから「なんとかやってみましょう」と言ってくれてはいたものの「来るんじゃないかな」と顔が言っていました。

しばらく、二人でいろいろなやりとりをしていましたが、そのうち、「おまえは字を知らない、俺が書く、おまえは自分のことを書け」私とくだんの女性とは顔を見合わせて、「やった!」

後日、そのイベントの拡大委員会の席上。「こんなやり方では、ちっとも前にすすまん。寺島、あのやり方をやれ」変われば変わるもんです。しかし、そのおじさんほどファシリテーターの楽しさを教えてくれた人はいません。ワークショップのことを学ぼうとした直接のきっかけは、そのと

きにあるようです。

「参加の場」の作り方

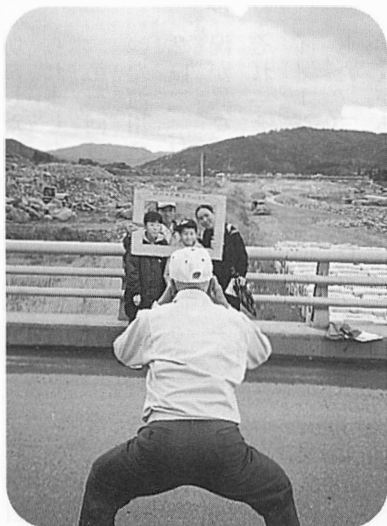
ワークショップで最も苦勞するのが、「場づくり」です。まず、広報などでお知らせをしますが、問い合わせがあるのは、数件です。「行政広報」だけでは参加しようという気持ちになりにくいのか、または、チームが分かりにくいのか、ワークショップということばが分かりにくいのか。その全部ではないかと思っています。

そこで、一人ずつに声をかけ、ワークショップの説明をし、参加を促すことが必要になってきます。もちろん地域の町内会組織、〇〇協議会へは真っ先に参加の説明会に出かけますが、未だに絶対的な方法はありません。ただ、市町村の職員の方で、庁内、町内へのネットワークを持っている方は、苦もなく「場」を作られます。誰に声をかけると、どんな人が動き出すか、

ちゃんと知っているんです。完全な「動員」では、良質な参加の場にはなかなかないのが現状です。なぜなら、発言の全てにわたり「私は、言われてきただけですから・・・」というのがあって、発言の内容が、タテマエを越えられないのです。自発的な参加が最も望ましいのですが、なかなか難しいのも実情です。ではその「参加の場」では、どんなことが行われているのでしょうか、実例を基に紹介します。

関川のワークショップ

写真①、これは一体何をし



写真①-1 はい パチリ

ているのでしょうか? 「この橋の下流の河川敷利用の方法を考えよう」というワークショップを開催したときの一幕です。この川は、一九九五年に大きな災害に見舞われました。橋の上で、写真を撮っています。この橋も濁流に流されてしまいました。川の流れと、山が作りだす空間がとても美しいところだったので「額縁を使って、あなたの好きな空間を(写真で)切り取って来ましょう」というゲームを行いました。記念写真になってしまいました。楽しく過ごしていることは伝わってくるでしょう。

この人たちは、この日が初めての出会いでした。お年寄りの方、女性、子供達。自分たちの住んでいる近くに計画されている河川敷公園で何をしよう



写真①-2 1995.7.11 川があふれた

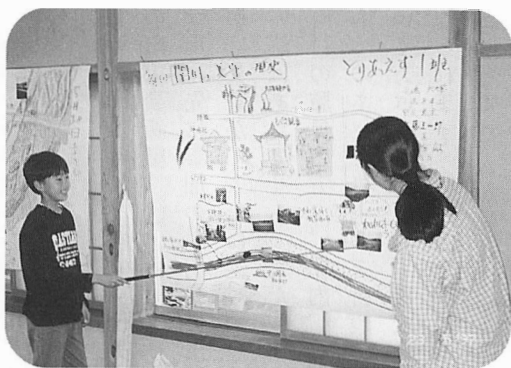
か? そこで「昔ー今ー未来にわたって、川と人、川と地域のことを考えよう」と呼びかけ、「昔はこんなことをして遊んだよ。」「石垣を作るために、石を運びあげた。」「用水の取り入れ口の堰を作るため、雪解け水の寒いときは、酒を飲んで川に入ったよ。」などと昔の川とのつきあいをお年寄りの方にお話しいただいたり、魚取りの話を教えていただいたりしました。

また工事の途中でもありましたので、工事の関係者にも出席していただいて、洪水後

の川はどうなるのか、今の工事は何をやっているのかを詳しく説明していただきました。

それらの全てを絵地図にまとめて、発表しました。(写真②)

二回目のワークショップでは、「私たちは、ここ(河川敷)で何を大切にしていくのでしょうか?」を考えていただきました。「お年寄りのところと体が休まるような河川敷」「子供が安心して遊べる環境にする」「川とふれあえるように。自然を大切にしたい、バランスのよい景観とする」などなど、たくさんの大



写真② 絵地図の発表
知らないことがいっぱいありました

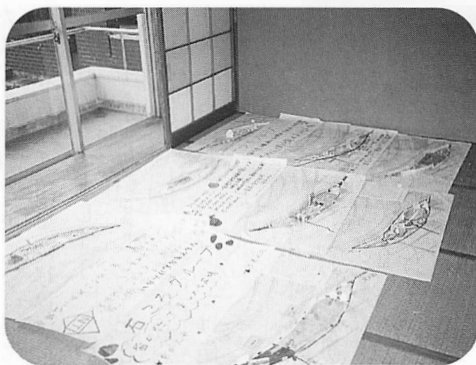
切にしたいこと、ものがあげられました。

第三回目は、長い距離を持った河川敷のため(計画区間2km)、右岸側、左岸側で状況が異なっている、それぞれ「その場における利用のイメージを考えていただきました。」この場所は近くに小学校がある、川と小学校の交流が生まれるようにしては?」「このあたりは人家や通りからも離れている、川の自然をありのまま再生できるゾーンにしよう。川自身の活力を高



写真③ おこし絵は楽しいものです

ましよう」と、簡単なおこし絵にまとめました。そのおこし絵に対して、どの考え方、どのハード、そこに流れるハートのどんなところがいいかを参加者皆さんにお伺いしました。実はこのあたりのプログラムになって、ようやく地区の皆さんも、「ほんとにやるんだ」「ほんとうに実現するんだ」と実感されたようでした。



写真④ 見事なおこし絵ができました

めて、自然を回復しよう」などの考えが示されました。

そこで、「今までの議論・学習を基に、ハードの整備とハードが満足するようなことを考え

それから、専門家による計画案の作成を行い(ワークショップの成果を生かすのではなく、下敷きにして)、もう一度、最後のワークショップを開いて、皆さんと話し合い、変更すべきは変更して、計画づくりが、終了しました。

現在は工事も進み、河川敷公園の施工も、終わりに近くなっています。付近の住民の皆さんは、「あのとき考えた、あれが出来ているよ」と顔を合わせる度に、喜んで話していただいています。

このときのワークショップの問題点をあげればきりがないのですが、最も重要な点が抜けていたのです。その反省に基づいて、来年度は何をすべきかを担当部局と検討を重ねています。それは、実際施工するにあたって、住民の皆さんに「手を出していただくしくみ」が欠けていたことです。「一緒に作ろうよ」は計画だけではなかったはずで、木を植え、花を植えることによって、もっと本質的なこ

とに触れたのではないかと考えています。そのチャンスをつとてしまったのではないかと深い反省をしています。私たちは参加者も、計画者側も、「命を育む川」とワークシヨップしていたのに、「時間がなかった。」は私の言い訳にすぎないでしょう。

池の周辺整備

ワークシヨップ

同じ時期に行なった別のワークシヨップで、「小さな池の周辺整備をしましょう」というものがありました。この池の整備で、何が大切かというと、池は池だけで成立しているわけではない。小高い丘の連なり、いわゆる里山とのつながりが保たれないと池は死んでしまうのです。従って、「そのつながりを断つもの、池の中のいのちの循環を断つことは行わない」としました。すると従来「整備する」という行なっていたことが、ことごとく「出来ないこと」になってしまいました。ただ、そ

れはワークシヨップにはいる前に予測できましたので、整備メニューがことごとく出来ないことになった場合の、行政の対応を決めていただき、「それでかまわない」との答えを手にしながら、始めることが出来ました。行政内部でも苦渋に満ちた決断であったことは、察しています。

先日、その行政の方から、「道をつくるよ、みんな集まってよ」と声がかかりました。地域の皆さんと、ワークシヨップに関係した人たちで、雑木林の中に小径をつくろうとするものでした。「その木は、切っちゃダメ。うん、それはいいよ」植物の生態に詳しい専門家の先生が現場監督をしながらほんとうに小さな小径ができあがりしました。後で行ってみたのですが、とてもすてきな小径で、歩いてみるととても歩きやすく、多くの自然につつまれている実感がある雑木林の小径でした。これと先ほどの川の事例のこととをもう一度考え合わせて下さい。何が欠けているかが、よ

く理解できると思います。

ワークシヨップから

見えてくるもの

違った地域、異なるテーマでワークシヨップを行っていきます。どれ一つとして同じ成果は現れません。全く同じ方法で行ったとしても、地域が違い、参加する人が違えば、違う成果が現れます。

「地域に個性がない」「うちの地域は何にもない」とよく耳にしますが、ほんとうにゆっくり歩いたことがありますか、ほんとうにゆっくり古老の話に耳を傾けたことがありますか。しばしば、その日のプログラムが終わってから、「なんだ、うちの地域も捨てたもんじゃないぞ、こんなにあるじゃないか」そんなことを聞くと、うれしくなります。私たちが、この三十年、四十年の間に見失っていたものが、新しい価値を持って現れるような気がしています。

今、新潟では、「小学校、中学校の子供達とまちづくりのワ



写真⑤ 親子で参加
いつでも ほほえましいものです

キラリ光るまち

みてさわってつくらんで

町全体が博物館

徳島市国府町

阿波こくふ街角博物館 寺岡 健二郎



支配する。要するに良い意味での共同体意識や連帯感が失われ、町独自の「ニオイ」が無くなりつつあるのではないか。「心の過疎」が進行しているのではないか。そうした危機感にも似た何かが私達を行動に駆り立てた。

「街博」誕生物語

昭和六十二年

国府町は大化改新（六四五）時に国庁が置かれた由緒ある土地であり、古代より徳島の政治、経済、文化の中心地。西の山には大古墳群、東は清流鮎喰川、北は大河吉野川に囲まれた素晴らしい土地。なのに近年元気がない。徳島市のベッドタウンとして人口は増加しても何か空虚感が

七月、地元の商工会に観光委員会が設けられたのが街角博物館（通称「街博」）開設の端緒になった。委員は七



人。しかし予算は年間たったの五万円。思いおこせばあの予算で街博のスタートがきれたとは、今はもう笑い話。

「なにか観光に関係する話をして酒を飲んでおしまい」というのが本音だった。しかし酒の力は恐ろしい。九月の酒席で、ある委員から「国府を有名にしようよ」との意見が出され、俄然議論白熱。「それなら何をすれば良いか、又我々で何ができるか」とトントンと話が進む。

国府再発見に委員が町内を駆け巡った末、徳島県を代表する産物、藍染しじら織・阿波木偶・蚕種・鮎・草花・洋らん・古美術・名石・ひょうたん・大規模なCATVなど

多彩で、その歴史・伝統・技等は県下有数、日本一まであることに私達も驚いた。

普通ならば一ヶ所に集めて公開すれば簡単な事。し

かし金もなければ土地もない。ならばと「国府町内に四ヶ所もある四国八十八ヶ所のように、みんなにその場所・その工場・自宅を開放してもらおう」「見学が出来て、触ってもらい、作ってもらえば面白いぞ」と知恵が浮かぶ。「設備費、改築等の費用は各自もち」という誠に勝手な結論に。更に線で結び面に広げ、町全体を博物館に見たてようとたくらんだ。

とんでもない考えに母体の商工会も参加予定者にも反発は勿論あった。しかしメンバーの目の色が違ってくる。昔のカミナリ族も、酒を飲み警官と大ゲンカした者も、今や

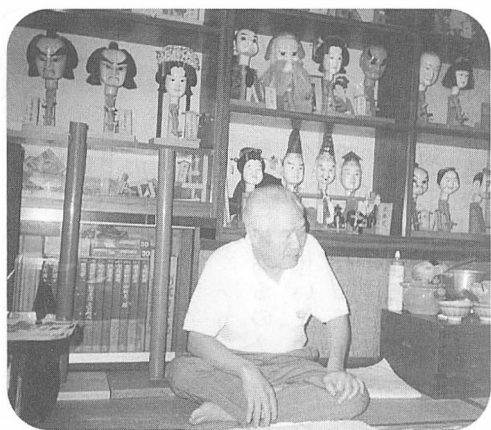


藍染め体験

PTAや体協の幹部、いっぱしの町の顔であり、オーナー経営者、白髪はまじるが顔色は青年団時代の勢いである。

「アホか」と呼ばれる程のパワーで諸問題を解決していった姿は今も忘れられない。徹夜の説得や討議をくり返し、町内のあらゆる方面で味方が立ち上がってきたのが昭和六十三年一月中旬であった。

「みて、さわって、つくらんで」をキャッチフレーズに十四館の街博の全容が見えてきたのは三月中旬。その頃新聞、ラジオ、テレビ等が注目



阿波木偶館の田村館長さん

年間ほぼ無休、入館無料（体験費実費）来館者に気軽に見て、さわって、つくってもらい、館長自ら館内の説明は勿論、町の歴史を解説し、人生論まで展開する等云わば「お接待」の心で対応してい

し、面白い企画とどんな報道してくれる。そこで、「ゴールデンウィークに人に来てもらえれば」と口走ったのが、

ウンのつき。自分の仕事も嫁さんに全てまかせ、錯乱状態の中でついに昭和六十三年四月三十日オープン。まったく無我夢中の約十ヶ月であったが今では懐かしく良い思い出になりつつある。

「街博」十年

あれから十年余、入館者は八万人をこえ、「街博の国府」という代名詞はすっかり定着した。初期的目的はある程度達成したことになる。

それ自身楽しみながら・・・。
又、一・三・五・八周年記念イベントや街角サイクリング&ウォーキングラリー大会、阿波踊り期間中の専用バスでの街博バスツアーは毎年実施。「国府の話をお土産に古里へ持って帰ってもらおう」と。構想から企画、運営、実施は全て民間サイドで決し、費用は運営委員（現在四十五名）や各館長の会費（年間一万二千円）と地元企業の善意の寄付でまかなっているのは誇ってもみたい。



全国国府フォーラム

五十年ぶりの戦友同士の涙の再会、街博で偶然めぐりあった男女が結婚する等胸を熱くする出会いもある。「心のこもった取組み」と県内外より数多くの札状には少々の赤字の苦勞も忘れさせてくれる。

そして街博十周年イベントは、国府というブランドベースを活かした街博ならではの自負を持って念願の「第一回全国国府フォーラム」を平成十年十月十日に開催した。全国の国府関係者など約五百人が参加して「歴史と文化を活かした町づくり」をテーマに情報交換を行い、今後の交流の契機となった。

思えば街博は、目的でなく手段の一つかもしれない。

「人が動き、ふれあう、心の開かれた町にしたい。人生の思い出をつくれる町にしたい。子供達にはかけがえのない古里の町にしたい。」

街博のドンキホーテ的たくらみはまだまだ広がっていく。酒を飲みながら・・・。

みなさん、こ
んにちは。

私は、伊予郡
広田村在住の二
十七歳独身貴族
です。

広田村ってどこにあるの？

という方多いと思います
ので一応。松山市のお隣砥部
町とスキー場のある小田町に
挟まれた国道三七九号線沿い
に位置する小さな山村です。

人口一、二五〇人ほどの、
ほんとに小さな村で私は生ま
れました。高校入学と同時に



松山市の下宿で一人暮らしを
するようになり、大学は熊本
というところで七年間一人の生
活を送りました。就職と同時
に広田村に戻り、通勤するこ
とにし今に至ります。

そして片道三五キロの通勤
に慣れてきた頃、青年団との
出会いがありました。きつか
けは簡単なモノで、ただソフ
トボールの試合に出たいとい
うとても今の愛青連会長には
言えないような入団動機でし
た。あわよくば念願の彼女で
も見つかればと（こっちが本
当）。

しかしそんなに簡単なモノ
ではありませんでした。三年
目には広田村青年団団長を任
され、まだまだわかっていな
い私は、まず団員確保に悩ま

され、訳の分からない会議に
呼ばれ、やっとやりたいこと
が見えてきたのは、任期の終
わる頃でした。

ですが丁度その頃、愛媛県
青年団連合会との出会いもあ
り大きな視野を手に入れたの
です。私のやりたかったこと、
それはもっともっと多くの友
達、仲間を増やすことでした。
おかげで県内外に沢山の仲間
ができました。人それぞれい
ろいろな顔があるように本当
に様々な考えを持っています。
そしてそれがネットワークさ
れた青年団、とても勉強にな
りますよー。まあ役員会は何
だと結構いそがしいですけど。

しかし広田村もだいたい道が
良くなってきたのは、喜ばし
いことですね。十何年も前と
比べてしまうとそれは比較に
ならないですけど、私が通勤
を始めた頃と比べても五分位
は短縮されましたから。やつ
と行政のがんばりが私たちに
も見えるようになってしまし
た。私は青年団に馴染んでき

た頃から役場のアンケートに
は必ず道路整備のことを書き
てきました。

今広田村にも若い人が帰っ
てくるようになりました。お
じいさん達の言う四十歳も越
えたような若い人ではなく、
本当に十代二十代の若い人で
す。でも、まだまだこの村に
は就職先がありません。です
から私のように通勤組が増え
てくると思います。そのため
にもやはり道路は良くなって
は・・・。交通事故を無くす
ためによりしく願います。

色々と思いつくままに好き
放題書いてしまいましたが、
私には、この広田村が本当に
よく合っていると思っています
す。私が生まれた当時の人口
が、二、二〇〇人足らずだっ
たようですが、私たち青年が
がんばってその頃の賑わいを
少しでも取り戻せたらと思い
ます。

広田村への想い



夢をもつ 夢をつくる 夢を育てる

松山市

福田 雅世

これは私の大好きな言葉です。そんなふうに育ってほしいとの両親の想いがあったのか、子供の頃この言葉を添えたイラストが部屋に飾られていました。その影響もあってか、確かに夢多き少女時代を過ごしました。とは言っても、地に足のつかない夢ばかりで、現実との落差に思い悩む日々でもあったように思います。それでも、この言葉は私の胸に生き続け、いいおばさんになってしまった今でも、夢を

描くことをやめることができません。

そんな私の夢づくりのひとつに、「ひがわり一座」の活動があります。ひがわり一座とは、まず簡単に説明すると、アマチュア劇団なのですが、ただ芝居を上演することだけが目的ではなく、芝居づくりを通して様々な問題について考え、みんなが目標に向かって努力するなかで、共に生きるということを感じ合おうというものです。もともと、ボランティア活動を通して知り合ったメンバーで旗揚げしたので、障害のある方々にも見ていただけたらと、今までにもいろんな工夫をしてきました。劇中に手話コーラスを入



れたり、字幕をつけてみたり、点字パンフレットを作ってみたり、昨年は手話でミュージカルにも挑戦しました。まだまだ試行錯誤の段階で、はっきりとした路線は決めかねていますが、それこそひがわり状態で新しい試みにチャレンジしています。

メンバーはそれぞれが、仕事をもち、また家庭をもちという忙しい中で、時間をやりくりしながら練習に励み、さらに道具作りも行なっています。その過程では、楽しいことばかりでなく、段取りどおりに事が進まなかったり、熱が入り過ぎてメンバー同士で衝突したりと、様々なトラブルもおこります。時には苦しくて投げ出してしまいたいようなときもありますが、公演を成功させるといって夢に向けて努力し、困難を乗り越えたときの充実感は言葉では言い尽くせないほどの感動です。これまで公演を続けてこれたのも、苦しみの後にやってくるこの

充実感を味わいたいためなのかもしれません。

これからも、この活動にかかわってくれているすべての人が、夢をもち互いに影響しあって、いきいきと輝いていてほしいと思います。そして私自身もいつまでも夢をもち続けながら、まだ幼い二人の息子にもたくさんの夢をもたせ、育ててあげられる母でありたいと思っています。



五周年記念公演
手話ミュージカル「船乗りクブクの冒険」
のワンシーン

風おしのちかい

地域に生きる二織錦在郷

えひめ地域づくり研究会議
代表運営委員

青木 光利



山は崢嶸にして
水泓澄たり
咄哉、同士よ
何ぞ優遊せざる

森をこよなく愛し、生涯森に思索し、自らの哲学の場とする高野の御山を開山した空海の詩の一節である。(竹内信夫著「空海入門」より抜粋)

千二百年前、この四国の島を巣立ち、国内外の時空を超えて創造的に生き抜いた先達の自在な境地に想いを馳せながら、私たち研究会議のこれからの歩みを考えてみたい。

昨年、発足十周年の一つの節目を越えた研究会議は、それまでの第一楽章ともいえる活動経験と実績を総括し、愛媛の各地における地域づくりに果たした役割の評価を得る一方で、会員意識の希薄化傾向と活動のマンネリズム化の危機にあることも指摘された。

その自省を踏まえ、さらなる十年に向けての研究会議がいかに在るべきか、第二楽章の基本的活動テーマを探る話し合いを重ねた。

結論として、私たちが住む足下の地域の内発エネルギーと生活文化の魅力を徹底的に

掘り下げて、変えるべきもの、変えてはならない事象を見極める研究活動とまちづくり実践運動を積み重ねてゆくことを改めて確認し合ったのである。

そのためには、一人ひとりの会員の自己能力の練磨とイノベーション、そこから導き出される共通の意志づくりが不可欠の要件となることをそれぞれに自覚し、地球時代に通じる本物のローカルライフスタイルと風土的個性「アイデンティティ」を確立してゆく具体的活動テーマを議論した。

戦後、経済開発一辺倒の国造りの果て、日本列島改造論がおこり、高度成長期を経験し、その究極のバブル経済が弾けた。四国の島にも瀬戸内三橋時代が到来し、高速自動車道化が本格化した。県都への経済や人口の一極集中化が促進され、それら中核都市間を連担する第二国土軸論議も進行中である。未曾有の不況時代にあって、過去の経済繁栄の夢の残像のみを膨らま

せている傾向がみられるのである。

日本列島総都市化傾向により地域社会が平板化されるなかで、幾重にも折り重なる山壁一つひとつに、山・川・海の自然とともにある里や町の歴史や文化が息づく四国の地も安閑としていられない時代の急転化にある。

多様な文化の複合共同体としての風土的個性を誇る四国に住む私たちも、今こそ一市民として真剣に自らが生きる地域の本質的個性を把握した自前の地域づくりを実践する能力を身に付けなければならない。

そうした状況下、九七年度総会フォーラムは「ローカルに生きる―四国遍路文化に学ぶ―」をメインテーマに掲げた。

時は一月二十四日、場所は小山田憲正運営委員が住職を務める越智郡玉川町山中の第五十八番札所仙遊寺、絶好の場で本質的議論が交わされた。



基調対談は愛媛に住む現代詩人、堀内統義さんと森原直子さん。堀内さんが青年時代社会との関わりの悩みのなかで詩作に入るきっかけを話せば、森原さんは自己内部の挫折感にある時、詩で癒された自分を発見し、ともに詩作に没入する話を通して、「到りつけなくても到りつきたい思いの作業Ⅱ詩作」と「遍路行」の同根を指摘。アマチュア詩人と自称する森原さんの「今在るところが源」、一方堀内さんの「無用の事物の大真面

目な探索者」とそれぞれの詩魂を吐露し、参加者に共感を呼び起こした。

続く分科会では、「交流が育てる地域」、「遍路に見る癒しの地域づくり」、そして「歩キ目デスと遍路みち」という三つのテーマでそれぞれ地域に根ざした問題提起と真剣な議論の成果を得た。

このフォーラムを通して、「四国へんろ道」の世界遺産登録という究極の大目標が打ち立てられたのである。

そして九八年度は「四国へんろ道」文化が四国の地とそこに住む人々にいかに根づいているか、四国の地域社会にいかなるお宝を持たらしているか、検証と学習の年とした。その学習の積み重ねのなかで「四国へんろ道」文化を考える四本の柱Ⅱ理念を打ち立てたのである。

一つは、四国は巡拝者の癒しの場であり、人間性回復の場であるということ。

二つは、巡拝者を迎える四

国の人々のボランティア精神が脈々と生き続けていること。

三つは、巡拝者と四国の人々との様々な出会いと文化交流の蓄積。

四つは、四国の山・川・海を結ぶへんろ道のネットワークによる折りの空間の円環的連繋と環境保全に果たす役割。

これら四本の検証テーマはそれぞれ、これからの地域づくりに欠かせぬ基本テーマである。

今、この四つの切り口から「四国へんろ道」文化が愛媛の各地にいかに根づいているか、東・中・南予での各ミニ集会

での検証作業を通して、九八年度総会フォーラムでの「四国へんろ道」文化を考えるシンポジウム開催に向けて準備中である。

私たちが住む足下から四国の島の魅力の根源と風土文化を再発見し、それに磨きをかけて、世界に通じる心豊かな地域社会づくりを目指したい。研究会議会会員一人ひとりの自律の精神と力を結集し、この愛すべき郷に在りて錦を織り続けてゆきたいものである。



仏木寺より齒長峠へ至るへんろ道より



— 研究員レポート —

過疎問題を考える

～過疎シンポに参加して～

研究員 檜垣 明宏

を眺めながらの朝食は、なかなかの贅沢であった。

ということで今回は、岡山県倉敷市で開催された「全国過疎問題シンポジウム'98」に参加してきた模様を報告します。

過疎から多自然居住

今回で十回の節目を迎えたこのシンポジウムは、十一月十日から二日間、「二十一世紀に挑戦する過疎地域―新しいライフスタイルに対応した地域の活性化―」をテーマに開催された。

まず一日目、開会式の後、過疎地域活性化優良事例表彰式があり、続いて、「新しい地域社会の創造と多自然居住―過疎からの真の脱却をめざして―」と題して、国土庁過疎問題懇談会委員でもある、宮口侗勉早稲田大学教授の基調講演が行われた。

その中で言われていたのは、「農村は長い間、長男が受け継ぐという原理で保たれてきた

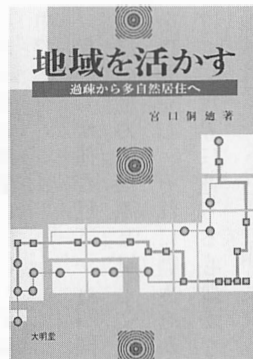
が、長男までが都市に出て行ってしまい、その原理が崩れてきた。その結果人口が減少し、従来の生活パターンの維持が困難となり、過疎問題が顕在化するようになった。(第一の転換期)しかし、バブル

崩壊などをきっかけとして、近年、大都市住民の中で、人間らしい生き方、自然との共生を求めて、田舎暮らしに憧れる人が現われ始めてきた。

しかし大都市の人口が少し減少しても、それがただちに農山村の人口増に結びつくわけではない。(第二の転換期)こうした流れの中で、人が多くいた昔を忘れ、大きくならないままの発展の型もあるはずである。それには、住民一人一人が力をつけ新しい多自然居住システム(①集落を越えた交流とネットワーク、②産業システム、③持続可能なものへの投資、④それらを支えていく人間づくり)を探り、行政がそれをバックアップしていくという形をとっていく

なければならない。過疎地域は数を頼りとしらない発展の仕方がある。」というような事だったと思う。

「宮口先生の話をもっと詳しく知りたい方は、写真の本を読んでみて下さい。」



'98.10 大明堂発行
A5版 2,800円(税別)

過疎対策のヒント

次に、過疎地域は、二十一世紀に向けて多様化するライフスタイルにどのように対応し、活性化策へ挑戦していくか、宮口先生をコーディネーターにパネルディスカッションが行われた。

その中で、美作女子大学学長の目瀬守男氏は、「過疎対策とは、経済・生活・環境“の三つのバランス、そして世代人口のバランスをとっていく

ジリリーン・・・朝四時、目覚まし時計が鳴った。あたりはまだ真っ暗である。急いで身支度を整え、駅へと車を走らせる。何とか間に合ったようだ。五時過ぎの岡山行き列車は人もまばらである。イスを倒してもう一眠りしていると、今治あたりで朝日に起こされた。瀬戸内の多島美

ことである。そのためには、地域住民の意識改革が必要であり、住民の中からプランナーを育てていかなければならない。また、地域内の技術者を利用した新しい産業づくりも必要である」と指摘された。

地域計画コンサルタント(株)

「玄」主宰の政所利子さんは、「地域の力を活かすⅡ《農力》、一級のものをつくる基礎技術Ⅱ《脳力》、人づくり・パートナーづくりと維持Ⅱ《能力》、といった三つの「ノウリョク」の総合性を磨いていかなければならない。また、地域自立の時代がやってきた今、昔語りの施策は変えていかなければならない。」と述べられた。

そして最後に、宮口先生が、「貫うより与える精神（GIVE & GIVEの精神）が人を育ててくれる。そして今後は行政が起業家になっていかなければならず、ハードを整備するにしても、どのように使いこなしていくかというソフ

ト面のプロセスを考えた上で整備していく必要がある。」とまとめられた。

情報化による可能性

二日目は、「情報化が開く過疎地域の新たな可能性」というテーマの分科会に参加した。

その内容は、今後、人口の増加が見込めない日本は、いずれほとんどの地域が過疎になる。そうした中で過疎地域が生き残っていくためには、もう人口を増やすことは考えず、今、住んでいる人が住みやすいまちづくりを進めていかなければならない。そこでインターネットやCATV等是有効な手段となり、医療・福祉・産業等の面で必ず役に立つてくるので、行政職員は、情報を社会的インフラとして考え、勉強し可能性を探りながら、地域内に情報弱者をつくらないように利用していかなければならない、ということだった。

住民主体がポイント

この翌日、当センターも共催として関わった「二十一世紀のえひめのむらづくりを考えるシンポジウム」が松山で開かれ、再度、宮口先生の講演を聞く機会を得た。

このときの講演も合わせて自分なりに考えてみると、過疎地域が活性化していく方法はないだろうか。

まず、今まで都市の真似事ばかり追ってきた近代化志向とか、人口を増やそうとかいう拡大志向を捨てることから始める必要があるようだ。そして今後は、小さい「ムラ志向」の「みんなだ」という考えも大切だが、一人ひとりが自分で考え判断できるパワーを身につけ、集落の外に目を向けた大きな

ネットワーク・パートナーシップを築いて一人当りの収益を増やしていく。

また地域はインターネット等を利用して常にオープンに構え、広域連携・交流をしていかなければならない。そして何より、地域住民が住みやすい地域独自の生活システムをつくっていくことが必要だと思った。



21世紀のえひめのむらづくりを考えるシンポジウム



まちセン事業レポート'98秋

～基調にあるのは
「ローカルに生きる」～

主任研究員 藤田 享

9/27 MY TOWN うおっちんぐ
実践講座 in 小田

今秋の事業の第一弾は、地域を観る目を養おうというこ
とでタウンウォッチング。

当『舞たうん』に好評連載
中の「MY TOWN うおっち
んぐ歩キ目デス&足ラテス」
の執筆者・岡崎直司さんの案

内で、巨樹古木と鍔絵文化の
残る里・小田町を舞台に実践
講座を開催しました。

あいにくの小雨模様の天気
にもかかわらず、県内各地及
び町内から約三十人が参加し
ていただき、一緒に町歩きを
楽しみました。

ところで、皆さん、「鍔絵」
こてえ



鍔絵のある土蔵をウォッチング

ってご存知ですか？左官さん
が壁を塗る「鍔」を使って、
土蔵や家の壁に漆喰で描いた
レリーフ。まさに芸術品です。

岡崎さんのお話によると、
県内に約五百点、うち小田町
に約五十点が残っているそう
ですが、特に、小田には正木
長兵衛という名人左官がいて、
いい仕事を残しています。

しかし、この鍔絵も建物の
老朽化や道路の拡幅に伴い、

どんどん消えゆく運命にある
ようです。現に、下見の時に
あった戸袋に描かれた「竹に
虎」の鍔絵が、一月のうちに
家ごとなくなっているとい
うようなこともありました。

大分県の安心院町^{あじひ}などでは、
鍔絵マップをつくって、タウ
ンツーリズムに結びつけてい
るようですが、そのようなこ
とで所有者や地域の方々の関
心が高まり、何らかの保存の
道が開ければと思いました。

また、小田町は、県指定天
然記念物である三島神社の乳
出の大イチョウや広瀬神社の
ケヤキ、イチイガシをはじめ
巨樹古木の多いまちです。そ
んな町だから見事に枝分か
れさせたこんな木の垣根も。



これぞ木の町の生活文化！

ウォッチング終了後、小田
町名物の「たらいうどん」を
いただいて解散。小田町を満
喫した半日でした。

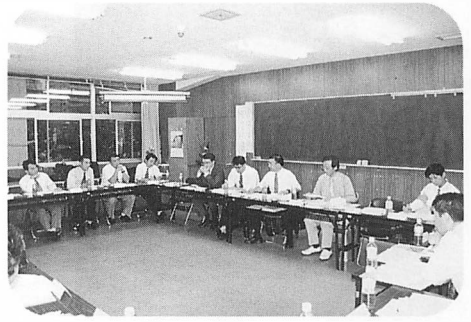
10/7 地域づくり研究サロン

今年のテーマは、これから
の「地域おこし三セク」。

近頃、何かと話題の三セク
ですが、民間事業者の参入が
得られにくい地域では、ある
意味で最大の資本力と人材資
源を有する行政が関与する三
セクの必要性・有効性はまだ
まだあると考えられます。

そこで、人口二千人余りの
小さな町ながら四つの三セク
を抱え、ご自身も(株)もくさん
の取締役である徳島県上勝^{かみかつ}町の
笠松和市課長をアドバイザー
に、コーディネートには
松山大学の村上克美教授にお
願いして、研究サロンを開催
しました。

県下各地から集まった二十
数名の関係者からは、地元産
品を使おうとするとコスト高
になるとか、行政との関係な



研究サロンの1コマ

こなしながら黒字を出そうと営業努力している担当職員の方にとって、何か参考となるものを吸収してもらええる場となったかなと思つた次第です。

11/5しまなみ海道地域 ミニフォーラム in 伯方

ど日頃の悩みが語られました。これに対し、三セク設立前に公益性を追求するのか、営利を優先するのか目的をはっきりさせ、それにあつた法人形態にすべき、会社である以上は利益が出るよう経営を考へるのがあたりまえで、経済効果がなければ長続きしない。

また、三セクの設立準備から軌道にのるまで役場からの派遣の人は変えず、その代わりそれ相応の手当をはずむ、さらに準備段階から有能な企業マンを迎えろといひといったアドバイスをいただきました。

少ない人数で、一人何役も

瀬戸内しまなみ海道（本州四国連絡道路・今治―尾道ルート）の供用開始が来る五月一日に決まり、開通に向けた取組みが本格化するなか、架橋により地域がどのように変わるのかを今一度整理し、架橋後の地域づくりについて、地に足のついた議論をしてみようということ、地域ミニフォーラムを開催しました。

アドバイザーの森戸哲地域総合研究所長からは、観光客相手だけでなく、地元の人々も楽しみ、利用できるようなツーリズムによる島おこし戦略について提案がありました。

その後、双海町の若松進一課長をコーディネーターに、各地域の自慢から入つたので

すが「うちの町には何もないけど」という謙遜の接頭語の次が、酒が入る前だったせいか思つたより出なかつたように感じました。

地域の個性は、その土地の誇り、自慢だという指摘もありましたが、架橋により遠くの地域の人も交流すること、自分たちの地域のいいところが見えてきて、それを個性として育てること、隣同士とも連携できるということになるのでしょうか。



地域ミニフォーラムの1コマ

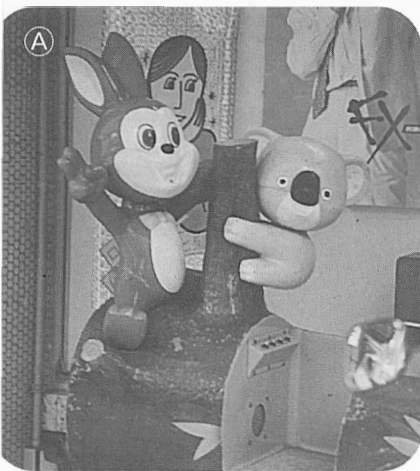
ともあれ四十代前後の比較的若手のまちづくり関係者が集まり、交流の場を持てたことは、それなりに意義があつた

たことと思ひますし、できれば開通後半年くらいたつて、変化が目に見え、一段落した頃に、今後の地域づくりについて、あらためて討論する場が持てればと、個人的には思つているところです。

まちセン事業'99に向けて

今年度も、残り三か月。今、県内七十市町村のまちづくりを紹介する冊子の編集に追われる一方、懸案のホームページ開設に向けて本格的な準備検討作業に入つたところです。なお、来年度のまちセン事業でこんなことをやってもらいたいといったことがあれば、ご意見をお待ちしています。

それから、当『舞たうん』も次号で六十号。還暦ということでもないのですが、全体の構成やレイアウトについて、見直しの時期かなと思ひます。これについては、アンケート用紙を挟んでおりますので、ごめんどうでもFAXで返送いただけると幸いです。



”卯“
干支探しウォッチング

“MY TOWN,” うおっちゃんく

歩キ目デス & 足ラテス



第六弾

岡崎 直司

平成十一年、一九九九年を迎えました。今年の干支はウサギです。さて、もうおわかりでしょう、今回は思い切つてウサギを探しに出かけます。

おっと、直ぐに野山へ駆け出してどうする。慌てない、アワテナイ。昔ならイザ知らず、人の暮らしが自然から随分遠のいてしまった現代、動物園にでも行かない限り、めつたに出会えるもんじゃあ無くなった。以前は、農山村なら、ごくフツーに見かけた小動物なんだが、今じゃ学校で飼ってる位か。天然モンはなかなか。

でもそこは歩キ目デス、ちよつと視点を変えましょう。それなりにゲットする方法はあるモンです。ほうらネ、居ました、イマシタ。正確には有りました。(A)

これは、SS製薬のマスコット・キャラクター、ピヨンちゃんです。薬屋さんの店先に、今でもタマに置いてある

ことがあります。

一体、この子はいつ頃から街に現れるようになったんだろう。歩キ目デス流探偵術で迫ります。本社広報部に早速TELを入れました。会社のマークとして昭和二十七年から使われているとのこと、で、ナント、既に半世紀近い。きつかけは、民放ラジオの放送開始に合わせてのコマーシャルだったとかで、時代を物語ります。

何故、ウサギがキャラクターとして選ばれたか、と言うと、これが如何にも製薬会社らしい。

ウサギでまず想い出すのは、“因幡の白兔”。例の、ワニザメに毛をむしられ丸裸にされて泣いている所へ、大國主命おおくぬのみことが通りかかる。蒲の穂綿よもぎわたてでもって優しくウサギを介抱する、というアレである。その時の恢復力が注目されたらし



い。今一つは、動物実験などで会社としては最も世話になつていて、且つ昔から人間に馴染み深い動物、という事で選ばれたらしい。

やがて、ホーロー看板や石こうの置物、塩ビ製品などが出回るようになり、会社のイメージ・キャラクターとして定着していったとの事です。ただ、最近あまりお目にかからなくなった訳は、昭和五十

年代後半から施行され始めた、道路交通規制法によって、道路に物が置けなくなった事によるという。もし、どこかの町に今でも残っていれば貴重品。虫干しでもして、是非今年は日の目を見せてやりたいものだ。

さて、お次は正統派和風デザインとしての波ウサギ。(B)ここは八幡浜市大法寺にある総樗造りの鐘撞堂。その扉に木彫が刻まれ、波千鳥と相對している。水を意匠にあら



うのは防火のおまじないだけれど、ウサギと波の相関関係、これが実はあまりよくは判っていない。白波の立つ波浪をウサギの跳ねる姿にダブらせ意匠としてアレンジしたものだろうか。だとすれば思い切ったデザイン・センスだ。きっと何か謂れがありそうだが。

(C) こちらもその一つで、松山市鷹子町で見かけた飾り瓦のデザイン。折りしも夕日に照らされ、入り日の波ウサギ。



五十崎町 福岡

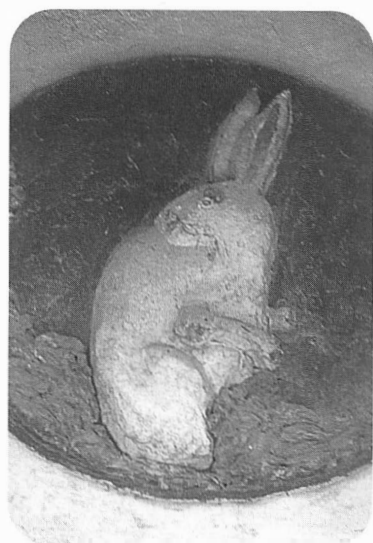
以下、いくつか、県内各地に残る鍔絵の中からウサギ仲間をご紹介して、今年の初講座を終えよう。鍔絵とは、左官職人が土壁に漆喰を使ってレリーフ状に飾る庶民芸術。その自由な鍔さばきの妙が、観る者を楽しませてくれる。あ、ゴメンナサイ。同じウサギでも、プレイボーイ誌ばりのバ



三瓶町 朝立



広見町 西野々



八幡浜市 川舞

ニーちゃんを期待してた向きには完全に期待ハズレでありました。

三間町の 毛利家屋敷 屋根ふき替え完了

三間町是能にある、旧吉田藩庄屋・毛利家屋敷の、カヤぶき屋根のふき替え工事が十一月に完成しました。

毛利家は、宝暦三年（一七五三年）に建設され、母屋・米蔵・納屋・長屋門・庭等すべてが江戸時代のこの地方の庄屋屋敷の姿をよく残しており、特に母屋は「角屋」と呼ばれるし字型構造の珍しい貴重なもので、平成六年、町の有形文化財に指定されています。

工事は、平成七年に住民有志らで結成した「毛利家を守る会」（古谷昭会長）が中心となり、専門のカヤぶき職人と多くのボランティアが手掛け、一万二千束のカヤを



使って行われました。

今後は農村文化の発信拠点として使用していく予定です。

〈見学問い合わせ先〉

毛利家を守る会事務局（羽藤）

☎（〇八九五）五八―二二五二

三間町教育委員会

☎（〇八九五）五八―三三二一

大洲肱南地区に れんが工房 土蔵づくり休憩所 誕生

「おおず赤煉瓦館」に、国内外の煉瓦や写真資料などを集めた「れんが工房」が整備されました。

赤煉瓦館は、明治時代後期、銀行として建設された煉瓦造りの木造建築物で、平成三年に改装し、観光施設として活用している市指定文化財です。

また、近くの明治・大正期のまちなみの残る「おはなはん通り」には、土蔵づくりの休憩所が新設され、「おはなはん」のロケ風景などを展示しています。

〈開館時間〉

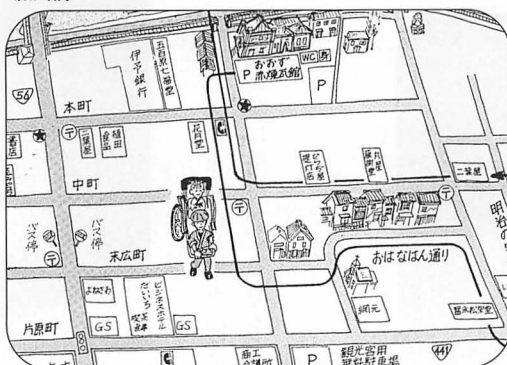
午前八時三十分～午後六時

〈休館日〉

毎週月曜日



肱川橋



市役所

（休日の場合は、その翌日）

〈問い合わせ先〉

おおず赤煉瓦館

☎（〇八九三）二四―二二八二

愛媛県美術館 オープン

愛媛県
(松山市堀之内)

県内美術活動の新たな拠点施設として「愛媛県美術館」がオープンしました。

県民館跡地に建設された新館には、モネの「アンティープ岬」をはじめ所蔵作品の展示室のほか、企画展示室やハイビジョンギャラリーなどが整備されています。

また、旧美術館(南館)には、県民ギャラリー・県民アトリエ・実技教室を設け、創作、学習活動の場として活用します。

〈開館時間〉

午前九時～午後五時

〈休館日〉

・毎週月曜日

(休日の場合は、その翌日)



〈問い合わせ先〉

・十二月二十九日～一月五日

愛媛県美術館

☎ (〇八九) 九三三〇〇一〇



えひめこどもの城 オープン

愛媛県
(松山市西野町)

子どもたちが遊びを通じてさまざまな体験活動を行なうことにより、創造力や自主性、社会性、豊かな感性などを育むことができる、「えひめこどもの城」がオープンしました。

お城風のメイン施設「あいあい児童館」は建物全体が遊び場となっています。また、園内には、くわがたのステージや創作工房をはじめ、ミニSL、ボブスレー、サイクルモノレール、森の広場など五つのゾーンごとに楽しい遊び場がつぎつぎと広がっています。

入場は無料。遊具等の使用料も利用しやすい料金となっています。



〈開園時間〉

午前九時～午後五時

〈休園日〉

・毎週月曜日

(休日の場合はその翌日)

〈問い合わせ先〉

・十二月二十九日～一月一日

えひめこどもの城

☎ (〇八九) 九六三三三三〇〇



新年 明けまして おめでとうございます

お知らせ

お知らせ

「えひめ地域づくり研究会議」'98年度フォーラム開催

テーマ『まちづくりに生きる遍路の恵み』

～ローカルに生きる パートⅡ～

■と き 平成11年1月23日(土)

■ところ えひめ共済会館(松山市三番町)

■プログラム 13:00～受付

13:30～開会

13:40～基調講演 「世界遺産スペイン巡礼の道と四国遍路」

講師：藤沢真理子(聖カタリナ女子大学講師)

15:00～休憩(早稲田大学道文化研究会作成CD-ROM上映)

15:30～フロアトーク

コーディネーター：渡辺 浩二 運営委員

①四国は癒しの場であり、人間性回復の場

話題提供者：小山田憲正(仙遊寺住職)

②四国の人々のボランティア精神

話題提供者：篠崎 克己(タイムダラー・ジャパン事務局長)

③巡拝者と四国の人々との文化の交流

話題提供者：岡崎 直司(タウンウォッチャー)

④四国の山・川・海を結ぶ遍路道の環境保全

話題提供者：守谷 和久(株都市計画研究所・四国代表取締役)

17:30 閉会

18:00～交流会

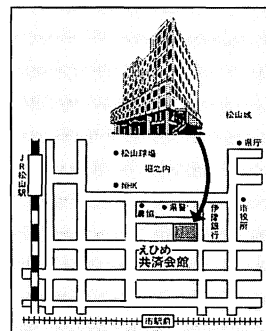
■参加費 フォーラム 2,000円 交流会 5,000円

■申込み 平成11年1月18日(月)までに

えひめ地域づくり研究会議事務局(財愛媛県まちづくり総合センター内) 檜垣まで

TEL089-932-7750

FAX089-932-7760



☆『喜多郡』のシンボルマーク募集☆

「喜多郡広域若者塾研究グループ」では、喜多郡のイメージアップと連帯感を高めるため、シンボルマークを募集しています。

平成11年3月20日メ切。入賞作品には豪華?賞金・賞品もご用意しております。

詳しくは☎0893-34-2307(肱川町公民館内 喜多郡広域若者塾「シンボルマーク募集」係)まで

あけまして

おめでとうございます

「ウサギ」年の幕開けです。
今年もウサギのように、耳を大きく立て、目を大きく見開き、まちづくり情報を敏感にキャッチして、皆さんにお届けしたいと思います。
本年もよろしく願いいたします。

(A)

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-0003

松山市三番町八丁目二三四

愛媛県生活保健ビル三階

(財愛媛県まちづくり総合センター)

TEL089(932) 7750

FAX089(932) 7760

発行/平成十一年一月十一日

(財愛媛県まちづくり)

総合センター

印刷/三創印刷株式会社